

引っ越してきた姉

白金 将

俺には姉がいる。

名前は笹森琴美と言って、自慢できる存在だ。

小さい頃から俺の事を可愛がってくれた、俺の可愛い姉。

今日は、姉さんが引っ越してきた日について話そう。

それは春、何気ない日常の中突然起こった。

「雄途、久しぶり！」

マンションの部屋のドアが開き、俺の名前を呼びながら姉さんは入ってきた。

茶髪のやや長めの髪が白い上着に映え、彼女の明るさを表現する。

……というより姉さん、何故ここに！？

「姉さんどーしたんですか金はありませんよ」

「そこを何とかさあ……じゃなくて、今日からここに住む事になったの」

「は？」

棒読みで聞いた問いには、驚愕の答えが返ってきた。

姉さんが、今日から、ここに住む、だと？

俺が家を出た後、姉さんは確か父さん、母さんと一緒

だったと思うが。

「何故そうなったし」

「いやー、お父さんやお母さんに迷惑かけるのもだめかなって」

「俺の迷惑を考えた事は」

「ない」

「やっぱり」

姉さんが俺と一つ屋根の下で暮らす。

聞いただけで心拍数が上がり、体温が2℃くらい上昇してしまった。

一緒に暮らすということは、一緒に朝ごはんを食べたり、一緒にテレビを見たりとか……？

「どうしたの？ 顔、真っ赤だよ？」

「何でもないわ」

その日の昼ごはんは、姉さんと一緒にファーストフード

店で食べる事になった。

「おすすめはあるの？」

「特濃チーズバーガーかな」

席を見つめ、姉さんと一緒に座った。

俺の向かいで姉さんは微笑み、コーラを口にする。

「あ……」

久しぶりに見た姉さんは、やはり綺麗になっていた。

茶髪が光で輝き、白い上着は姉さんの清楚さを出して

いる。

少しだけ見える姉さんの生足は、上着に負けないくらい白く綺麗だった。

ぼーっとしている俺に、姉さんは心配そうにたずねる。

「何か様子おかしいよ？ 風邪でもひいた？」

「……いや、別に」

俺のチーズバーガーを持つ手がなかなか動かない。

この気持ちは何と言うか、その、初恋に似ているような気がする。

相手が姉さんだという事は分かるのだが、まるでそうでないみたいだ。

「食べないなら私が食べるね」

全く動かない俺が持つチーズバーガーを、姉さんはばかり。

まるい食べ跡を残しながら、姉さんは呆然とする俺に向かつて微笑んだ。

「雄途の味がするね」

「そ、そうなのか？」

今、姉さん、俺の食いかけを思いきり食べていたよう

な。

それって、その、間接キスと言うものではないのか？
姉さんの食べた後に俺が食べるって、何だか物凄く緊張する。

いや、緊張以前にもう、心臓が破裂しそうなんだが。

マジで。

「食べないの？ 私の食べかけはダメだった？」

「た、食べるわい」

俺は姉さんの食いかけチーズバーガーをぼくつと食べた。

普通のチーズバーガーよりも甘くて、何だかほんわかした味だ。

美味しい。1000円出しても良いくらい。

「雄途、ここのお金払ってくれる？」

「わかった」

「あれ、素直に払うなんて珍しいね。前までは頑なに断つてたのに」

「……たまには良いじゃねえか」

姉さんに払わせたくないのが本心だった。

喜ぶ顔が見たくて、俺はつい言っていたのだ。

夜は姉さんが手作りの料理を出してくれるらしい。

「何を作ってるんだ？」

「ヒ・ミ・ツ」

エプロンに着替えた姉さんはフライパンを持ちながら言った。

茶色い服に、水色のエプロンがよく合っている。

見とれそうになる自分に喝を入れ、俺は我に帰る。

「……手伝うか？」

「大丈夫だよ。雄途に食べて欲しい料理は私が作るから」
その瞬間、俺の胸は何かに打たれたかのような衝撃を受けた。

な、何故だ。何故俺は姉さんの言葉でこんなに興奮するんだ。

腕まくりをした姉さんの腕は細く、その細さからは考えられないほどの色気を辺りに漂わせていた。

姉さんの身体からは甘い匂いがして、俺の脳を停止させる。

「雄途……どうしたの？」

姉さんはこつちを見て言った。

意識がパージしていた俺は我に帰り、俺のすぐ前にいる姉さんを見る。

姉さんの顔はすぐそこにあり、恐らく、真っ赤である
俺の顔はバレバレだ。

「様子、昼から変だね。ひよつとして、私が来たから？」
「っ……」

息が詰まり、心臓の心拍数は跳ね上がり、手足はがくがくと震える。

立てなくなつてその場に崩れた俺の顔を、姉さんはしやがんで覗き込んだ。

胸の谷間がちらと見え、俺は顔を背けながら呼吸を整えようとする。

「……私で、興奮してるの？」

姉さんは俺の両肩に触れた。

姉さんの顔もほんのりと染まっついていて、吐く息が荒くなっている。

そして視線がぶつかり、姉さんは力なく俺の方にもたれかかった。

俺を抱くように姉さんは倒れていて、胸が俺の胸板に当たる。

「姉さん……何で」

「おかしいの。何だか……変な気持ち」

姉さんの手が俺の肩、腕、手の甲。

滑るように移動して、俺の皮膚をくすぐっていく。

「……はあ、……はあ」

「姉さん……」

姉さんの息は俺の顔にかかり、鼻の先を湿らせた。

嘘だろ……どうして、姉さんが俺を？

俺の中でも訳が分からず、ただパニックになりながら姉さんを受け止める。

そして姉さんは、言った。

「キス、してもいいかな」